

2022（令和4）年12月7日

「ドイツ語の接続法について — als ob (as if)文をめぐって —」

発表者：成田 節（東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授）

「あたかも～かのように」を意味する als ob 文は、日本のドイツ語教育では多くの場合、接続法第2式（仮定法過去に相当、以下接II）を用いた「非現実話法」の枠で紹介・説明されている。

(1) Anna hat natürlich Interesse, doch sie tut so, **als ob** sie kein Interesse **hätte**.

アンナはもちろん興味を持っていますが、興味がないような振りをします。

発表では最初に、考察の前提となるドイツ語接続法の形態2種と用法3分類、およびそれら相互の関係を概観した。その上で、als ob 文の定動詞としては接続法第1式（仮定法現在に相当、以下接I）も直説法（indicative）も用いられるので、als ob 文を非現実話法とすると、非現実話法には接IIを用いるという原則が崩れてしまうという（既に橋本文夫などが指摘している）問題点を再確認した。

次に事例調査の報告をした。まず、ドイツ語コーパス DWDS (Digitales Wörterbuch der Deutschen Sprache ドイツ語デジタル辞典プロジェクト) から集めた1900年から2018年までの事例約300で als ob 文の定動詞を調べ、総じて接Iと直説法で3割から3割半を占めることから、これらを例外扱いすることは妥当ではないことを改めて確認した。さらに、小説2編（カフカ「変身」、エンゲ「モモ」）のデータから、als ob 文およびその変種とされる「als+定動詞」文を全て収集したところ、「als+定動詞」文の方が断然多いことがわかり、先行研究の記述にも触れて、ドイツ語教育における als ob 文と「als+定動詞」文の扱いの再検討の必要性を指摘した。またこの構文では接Iの方が接IIより有意に多いということがわかり、この構文で接Iを等閑視できないことを再確認した。

定動詞の形態調査に続き、als ob 文の意味内容と定動詞の形態の関係について考察した。als ob 文の定動詞の形態（接IIか接Iか直説法か）と文が表す事態の（非）現実性について、先行研究の記述も参照した上で事例を観察し、接IIだと非現実性が表される、接Iや直説法だと非現実性が弱まるという傾向が見られる場合もあるが、（非）現実性によって定動詞の形態が決まるというほどの関係はないという見解を述べた。

最後に、非現実話法の基本は「前提と結論」の結合であり、特に「前提」の内容が現実（事実）に反するという点が重要である（一旦、非現実の事態を想定してみることが非現実話法の要件である）とする先行研究の見解に触れ、als ob 文はこれには当てはまらないと考えられるので、als ob 文を「非現実話法」として説明するのは最善の方法ではなく、定動詞として接IIと並んで接Iと直説法も用いられることから、（中心的な用法ではないとしても）間接話法の枠に入れる方が妥当だと主張した。